

春告草

第120号 平成30年10月12日 進路指導部発行

進路探求の秋！

中間試験が終わりました。6年生にとっては最後から2番目の定期試験が終わったこととなりますね。行事も一通り終わり、いよいよ受験に向かって、さらに力をつけていく時期になりました。暑かった夏も去り、勉学の秋です。しっかり取り組んでいきましょう。

5年生は修学旅行もありますが、来年の科目選択を決めなければいけない時期です。現行のセンター試験を最後に受験する学年で、いろいろと気をもむことも多いと思いますが、しっかりと力をつけておけば良いのです。新テストかかってこいっ！と気持ちを強く保って、学力向上に努めてください。もちろん、新テストに関わらないのが一番ではありますが…。進路決定の秋をしっかり前向きに過ごしてください。

4年生はようやく大学を視野に入れることができた時期でしょうか。夏のオープンキャンパスで見してきたこと、体験してきたことが皆さんが今後、進路選択・進路決定していく際の判断基準の一つになると思います。また、皆さんの学年から始まる新テストについても研究を進めてみてください。まだ不確定な要素はあるのですが、皆さんの先輩方が新テストの試行テストを受験に行ってくれています。受験結果などのデータが分析されて、入試センターなどからも発表されています。進路研究と併せて新テスト研究も進めていきましょう。

勉学の秋、進路決定の秋と続けてきましたが、これからも進路については悩むことも多いことでしょう。自分のこれからの人生にも関わってくる大事な選択です。決して妥協することなく真剣に自分と向き合い、進路探求の秋を過ごしてください。

秋のオープンキャンパス・研究室公開

まもなく大学は学祭のシーズンを迎える。その大学の雰囲気、カラーを強く感じることもできるので、志望大学であれば足を運んでみるのも良いだろう。その時、お勧めしたいのが研究室見学である。特に理工系大学・学部を目指している人にとっては、どんな研究をしているのか実際に見てくると、より一層、興味がわいて志望動機が高まってくるだろう。勉強にも集中して取り組めるようになるはずだ。もしかしたら、新たな出会いに遭遇するかもしれない。自分では考えてもみなかった発見に気づくかも知れない。4年生、5年生は11月に模擬講義があるが、大学の先生に来ていただいて実施する模擬講義は、どうしても限られた数の講座しか提供できない。模擬講義の後のアンケートには毎年必ず、自分の聴きたい講座がなかったと、不満を書く人がいるものだが、そういう人こそ、秋の大学祭&オープンキャンパス・研究室公開に出かけてみよう。進路部に案内のあった大学をいくつか紹介する。

■国際基督教大学(ICU Festival)10月20日(土)~21日(日)

キャンパスツアー、公開授業他

場所:国際基督教大学

■首都大学東京(みやこ祭)11月1日(木)~3日(土)

オープンラボ 11月3日11時~16時

場所:首都大学東京南大沢キャンパス

■法政大学(小金井祭)11月2日(金)~4日(日)

研究室紹介企画 11月3日(土)、4日(日)

場所:法政大学小金井キャンパス

■電気通信大学(調布祭)11月23日(金)~25日(日)

オープンキャンパス 11月25日10時~17時

場所:電気通信大学調布キャンパス

センター試験まで99日
頑張れ四期生！

Kites rise highest against the wind – not with it.

風が一番高く上がるのは、風に向かっていない時である。
風に流されている時ではない。Winston Churchill

共通テストが発信するメッセージ

センター試験はあと2回で廃止され、2021年度入試より「大学入学共通テスト」が実施される。この試験を現役で受験するのは、現4年生以降だが、東京外語大が新テストを先取りする形でスピーキングテストを導入するなど、6年生、5年生も無縁ではない。新テストで問われる学力とは何なのかを見て、入試傾向を考えてみたい。

新テストで何が変わる？

センター試験と大きく異なるポイントは、国語と数学で記述式問題が導入される点だ。大学入学段階で“知識の理解の質”と“思考力・判断力・表現力”をしっかりと問うという共通テストの本来の役割をさらに向上させ、評価の精度を上げるための改善であるという。授業で培ってきた知識を多様な場面で活用できるかをみるため、例えば学校での授業や社会における課題解決の場面、資料やデータを基に考察する場面などを設定した問題がこれまで以上に多く出題されることになる。

こうした新テストの作問意図は、個別入試にも影響するだろう。主体性や多様性、協働性を含めた幅広い学力を評価する傾向は、今後ますます増える可能性が高い。また、記述式問題が注目されているが、これまで通りマーク式問題も引き続き出題される。今後は、知識・技能の習得確認だけでなく、表現力は別としても、思考力・判断力を評価することが重視され、知識の理解の質を問う出題が増えるということになる。

大学入学共通テストの概要

2020年度入試まで		2021年度入試から	
共通試験	大学入試センター試験 (マーク式)	大学入学共通テスト 国数に記述式+英語外部試験	
区分	一般・AO・推薦 (推薦・AO:学力以外を重視) (一般:学力重視)	一般・総合型・学校推薦型選抜 (総合型・学校推薦型:学科試験が必須) (一般:学力以外の能力評価も重視)	
英語	読む・聞く・書くの3技能 ・センター試験:「読む」「聞く」 ・国公立大学個別試験 ・私立大学試験	読む・聞く・書く・話すの4技能 ・外部試験(資格・検定試験)の活用 ・共通テスト:2技能型と外部試験を併用 ・国公立大学個別試験 ・私立大学試験	
	・共通テストでの外部試験利用はなし	・センターが運営する「大学入試英語成績提供システム」では、共通テストの外部試験利用は制限あり ※高3の4~12月の成績2回まで提出可	

試行調査から見てきた新テストの変化

新テスト導入に向けて試行テストが行われている。本校でも昨年は三期生が参加し、今年も5年生が参加する予定だ。ご苦労様と言いたい。センター試験と比べ、どこが変わるのを見ていきたい。

■変化ポイント1 問題文が長い

図1は問題文の量を2017年のセンター試験と比較したものである。図にもあるように、数学や理科、また世界史や現代社会でセンター試験に比べ1.2倍から2倍以上になっている。英語の問題文量増加は、問題構成が変更となり、全問読解型となったためである。

問題文量のこのような増加の要因をまとめたのが表1である。このような出題に対応するためには情報の選択が重要で、情報を鵜呑みにするのではなく、客観化・相対化して見るスキル、多くの情報の特徴を素早く読み取り比較するスキル、得られた情報を統合化して結論に結び付けるスキルなどが必要となる。

図1 問題文量の増加
2017年センター試験との比較(問題文の行数)

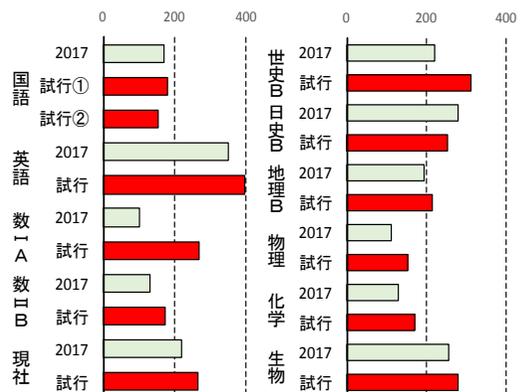


表1 問題文量増加の要因

変化の要因	背景として考えられる方針
会話(対話)文による出題	「主体的・対話的で深い学習」の推進
実用的文書・資料による出題	「生きて働く知識・技能」の育成
複数のテキストによる出題(図・グラフ・表・イラスト・写真の多用)	「情報総合」スキルの重視

方針は、中教審答申@学習指導要領の改善及び必要な方策等について(2016. 12)

■変化ポイント2 場面を設定した問題が増える

第二の変化は「質的变化」である。

具体的な変化としては、「多量の情報から必要な情報を見極め、短時間にそれを処理しなければならない問題」の出題や、「生徒にとって身近な例や身近に感じられる場面（日常生活の一コマや、授業や発表、実験や観察などの学習の場面）を設定して出題する問題」が増加している。この変化の背景、関係する方針を表2に示した。

このような出題では、情報処理能力の中でも、多くの情報を分類して、その分類に基づいて結論に結び付けるスキルや、知識を身近な例や場面に適用して活用するスキルが必要となる。設問毎の正答率をみると、授業で学んだことを日常の具体例に関連づけることに不慣れであること、日常の例に基づく出題では、扱われる数値の桁数が大きくなるため計算が煩雑になり、計算力がポイントとなった例が多かったことなどが指摘されている。

表2 問題設定変化の要因

変化の要因	背景として考えられる方針
情報処理能力重視	「言語能力・情報活用能力」の重視
身近な例・場面	「学びと生活・社会との結びつき」の変化
	「主体的・対話的で深い学習」の推進

■変化ポイント3 図や表、史料を使った問題が増える

三つ目の変化は「素材の変化」である。

入試問題は問題文を読みながら、途中で設けられた設問に答えていくという形になっていて、そこでは文字や数字、記号など多くの「文字情報」を整理しなければいけない。センター試験は其中でも、文字情報以外の図やイラスト、写真などを積極的に活用してきた試験だが、今回の試行調査でもその特徴が一層際立っている。

図2は各科目の問題で「図」「表」「史料」などの「視覚的資料」が何点使われているのかを2017年のセンター試験と比較したものである。国語では、記述式問題はもちろん、現代文や漢文でも使われている。これまではあまり見られなかった数学で急増し、その他にも世界史、日本史、現代社会、生物などで多用されている。英語では、Web や Blog などインターネット関連の素材が多く取り上げられていた。

このように新テストでは、これまでのような「文字情報から、設問の要求に沿って解答を考える」という方法だけでは対応が難しい問題が増える可能性が高い。この種の問題では、文字情報以外の資料からも必要な情報を見つけ出し、それを文字情報に変換してから解答を考えるという、二段階のプロセスが必要となる。

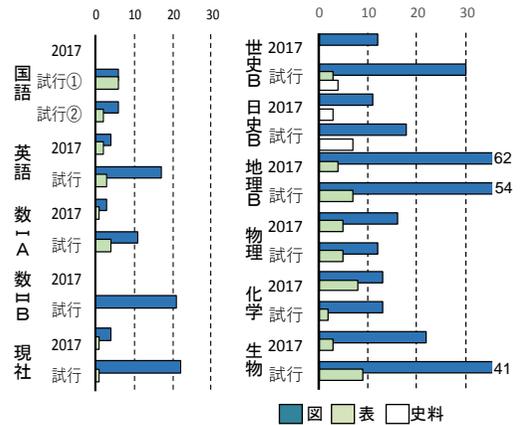
さらに詳しくみると、素材の変化の特徴には二つの面がある。

一つ目は「質の変化」。これまで問題に取り上げられた素材としては、教科書や資料集などに掲載されたものが多く、その意味で事前の対策が可能な範囲だったが、今回の問題では、教科書や資料集では扱わない資料やごく日常的な内容の資料などが多く取り上げられている。何れも事前の対策が難しい資料であり。基本的には初見で対応する力が要求される。

二つ目は「量の変化」である。科目にもよるが、従来に比べ極端に増加している。これまでと同じ時間内で対応することを考えると、文字情報とそれ以外の情報を短時間のうちに結び付けて解答しなければいけないことになる。

また、解答に不要な情報もたくさん含まれていて、その見極めが重要となるので、より慎重に情報を検討する姿勢が大切になり、身近な事例に学んだ知識を活用できるかどうかを判断することも重要なポイントとなる。素材や設定を様々に変えて問われるので、柔軟な対応力が必要となり、「一問一答的な学習」では対応が難しいと予測できる。

図2 素材の変化
2017センター試験との比較(図・表・史料)



■変化ポイント4 択一式以外の選択方式が増える

記述式問題が出題されることが新テストの大きな注目ポイントであるが、マークシート問題についても従来とは異なる新たな出題形式が検討され、解答形式は多様化している。

今回の試行テストで新たに試された形式としては「記述式」の他、「正しいものをすべて解答」する形式と「連動型複数選択」という形式が一部の科目で出題された。

「連動型複数選択」とは、複数の正解の組み合わせが考えられるような問題を出题する形式。前に答えた解答にもとづいて後の問題を解答する問題の場合、従来の出題では、前問で間違えるとその結果を使った後の問題も当然不正解になる「ドミノ倒し」構造になりがちだったが、「連動型複数選択」では、たとえ前の設問で間違った解答をして失点したとしても、それにもとづいて正しいプロセスを経ていればこの答えになるという別の正解も認める解答形式である。

図3は解答形式別の設問数の割合と正答率を、全科目を合計して集計したものである。(ただし、段階的評価となる「記述式」の正答率データは含んでいない。)

この図からわかることは、新しい解答形式の設問はごく一部であること、全設問の半数以上を占める「択一式」(ひとつの正解を答える形式)に比べ、新しい形式である「すべて選択」(図では「全選択」)は正答率がかなり低くなること、「組み合わせ選択」(図では「組選」)は正答率が高いこと、などだ。

これらの出題形式の多様化により、統合的な思考力や表現力、具体と抽象を行き来する力、概念を活用して判断する力などに加えて、選択肢を比べて「より正しいものを選ぶ」ということではなく、個々の選択肢を「これは正しい」と判断できる、より絶対的な正解性などが要求される。

なお「連動型複数選択式」や「穴埋め式」(正解となる数値や記号を選択肢から選ばせるのではなく、直接マークする形式)の正答率が低いが、これについては、処理すべき情報量が増加したために限られた時間内ではこなされなかったことによるものと思われる。

要求される、知識の理解の質とは？

以上、今回の試行テストの問題と正答率の分析から新テストの特徴を見てきたが、今回と同分量・同質の問題が本試験でも出題されるわけではないだろう。様々なタイプの問題の出題可能性を模索している段階ではないだろうか。ただし、今回の調査で見えた新テストの方向性に大きな変更はないと思われるため、その方向に応じた準備が必要となることは間違いないだろう。

また、新テストを踏まえた各大学の入試改革も急速に進められている。新テストを受験する4年生だけでなく、6年生、5年生もこういった動きには敏感になってもらいたい。上でも述べたが、どの科目でも問題文が長文化する可能性は十分にあるが、学習法がこれまでと大幅に変化するかということ、そうではないだろう。ただし、学習の基礎となる教科書、資料集・図録、用語集をさらに使い込んでいくといった丁寧な(手を抜かない)学習法をより尊重しなければいけない。

2016年名古屋大学法学部前期試験では、憲法学者が「日本社会の構造変動とそれに応じた改革・改造」について述べた1万字以上の文章を示し、「あなたは、この問題をどのように論じていくべきだと考えるか」を述べさせている。選挙権が18歳以上に改正された年で「あなた方は、自分たちの国をどう創っていくのか述べよ」という強烈な出題でしたが、まさに知識の理解の質と思考力・判断力・表現力を問うという、新テストを先取りした出題だった。新テストだけでなく、社会の大きな動きが入試の新しい傾向を作っていくのだ。

視野を広くとり、若者らしく自己研鑽に励んでください。

図3 解答形式の多様化
解答形式別の設問割合と正答率(全科目合計)

